



Title	臨床哲学の居心地悪さ : 中岡成文さんへの手紙
Author(s)	本間, 直樹
Citation	メタフュシカ. 2014, 45, p. 15-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

臨床哲学の居心地悪さ ——中岡成文さんへの手紙——

本間直樹

2014 年 7 月 22 日

岩国でのお暮らしはいかがでしょう。中岡さんとはずいぶん長いおつきあい、そう、わたしがまだ大学に入りたての 19 歳のころからですから、もう四半世紀のおつきあいとなりますが、おそらく初めてお便りを差し上げることになります。

中岡さんのご退職を記念する号にわたしも何か書くことになりました。何を書こうかとずいぶん迷いましたが、中岡さんに宛てたいいくつかの手紙を認めることにします。中岡さんに初めてお会いしたころ、二人のあいだでよく話題にのぼり、ご本も長いあいだお借りしていた、フランスの哲学者のあの本を思い出しながら、わたしが訪れた場所から送る手紙という体裁で書くことにしました。きっと中岡さんにも気に入っていただけるのではないのでしょうか。

中岡さんとの思い出の本です。わたしはこの本を当時、教養部イ号館にあった中岡さんの研究室からずいぶん長い間借りたままにしていました。その本の内容、ソクラテスとフロイトについての思弁よりも、その文体、書簡体に当時わたしは強烈なインパクトを受けました。中岡さんとこの本について話しあったのも、あのふるくてうす暗い研究室でした。このイ号館で——現在は「大阪大学会館」と呼ばれるようになりましたが——わたしはさきほど夜の授業を終えたところです。この建物もずいぶん変わってしまいましたね。大阪大学でもっとも古く、唯一クラシカルな雰囲気もっていた建物、高い天井、木材の床ばり、木の窓枠、木の椅子と机、黒板が残っているむかしのイ号館がわたしは好きです。中岡さんがおられた研究室も改装されてなくなってしまいました。それが何より、わたしにとってはさびしいことです。ノスタルジーが過ぎるでしょうか。

ところできょうの授業は、コミュニケーションデザイン・センターの開講するオムニバス形式の授業で、わたしが最終回のまとめを担当しました。さいきんわたしは哲学相談、哲学プラクティスの問答法をじぶんで考案し、それを授業に取り入れています。みんなで円になって座るのですが、わたしがその場で考えた質問にわたしも含めた全員が一人ずつ答えていくのです。議論は一切しません。ただ問答を繰り返すだけです。中岡さんに連れられて半信半疑の状態で哲学相談

の調査に行ったのが16年も前のことです。わたしがじぶんで取りかかりはじめるまでずいぶん時間がかかりました。ようやくそれを授業に活かすことができるようになったと思います。

イ号館の教室といえば、わたしが大学一年生のときの冬を思い出します。中岡さんの講義をはじめて聴きました。たしか土曜の朝の講義で、イ号館のふい講義室の黒板に、世界－内－存在、とおもむろに書かれた文字がわたしの脳裏に焼き付いています。理系向けの講義で、主題は科学論、科学哲学を扱ったものでした。講義じたいは、その当時のオーソドックスなもので、中岡さんは、いつもごじぶんの書かれた教科書を使っておられました。少し前に書かれた、教養部向けの哲学の教科書のわきに、科学哲学に関する手書きのノートを置かれて講義をされていたように記憶しています。

その後の春休み、理学部の友人といっしょにおなじイ号館のてっぺんにある、中岡さんの研究室にお邪魔しました。階段をひたすらのぼった、灯台のてっぺんのようなところで、両隣に研究室もなく、阪大豊中キャンパスのなかでも、もっともさびしい場所に思えました。そこにわたしたちは、ヘーゲルの「裏ゼミ」をやってほしい、というお願いをしにいったのです。ヘーゲルを読んでみたいんですが、何がいいのでしょうか、というわたしたちの質問に、中岡さんは、わたしは初期ヘーゲルが好きだから、『キリスト教の精神とその運命』はどうだろうと言われました。そしてわたしたちは、イ号館のてっぺんの中岡さんの研究室やその隣にあった、おそろしく眺めのいい教室で、本を囲み裏ゼミをはじめました。キリスト教に疎かったわたしは、冒頭のアブラハムの話にとっても戸惑いました。正直、ドイツ語もあまりわかりませんでした。でも、この時期のヘーゲルは愛のなかに融和の可能性を見ていた、というお話が脳裏に焼きついています。うろ覚えですみませんが、ヘーゲルの説く愛は、痛み、それも引き裂かれる痛みのなかに現れる、と。このころ、わたしは痛みというものに非常に関心を寄せていたのです。昔話は退屈かもしれません。夜も更けたので、今晚はここまでにします。おやすみなさい。

2014年7月26日

まだ興奮がおさまりません。昨年の夏、中岡さんといっしょに大阪でお会いした、ブラジルの哲学者、ウォルター・オマール・コーハンさんを覚えてられますか。そのとき彼に実演してもらった対話法を、こどもたち相手にやってみました。わたしは昨年、箕面市小野原にある多文化交流センターで、外国にルーツをもつこどもたちと「こどものてつがく」をはじめています。きょうは、気にいった楽器をそれぞれ選んで、音を出し、その音からどんな動物を連想したか、話しあったのです。とても楽しめました。ここは学校の教室とはちがう場所であることも少なからず影響しているかもしれません。わたしは今までとちょっと違うじぶんになれたし、こどもたちとの関係も大きく変わったような気がします。これも中岡さんの考えられる自己変容のひとつでしょうか。前回のセッションでは、絵本をみんなで読むところまではみんなで楽しくやれたのですが、絵本についてどう思ったか質問したところ、こどもたちに、おもしろくない！ とはねつけられてしまいました。でも今回は、わたしのこれまでの対話に関する固定観念を捨て、とにかくみんなで楽しもうと思い、体当たりで遊びました。するとどうでしょう、考えるとか話す

とかが違った風を感じられるのです。全員であたらしい変容を経験できたのかもしれませんが。来月、ブラジルのウォルターを訪問する予定ですが、この体験を報告するつもりです。

わたしはアタマでっかちで、実際に経験もしないままアタマで考えただけで判断してしまいがちです。いま熱心に行っている対話活動ですら、最初は尻込みしていました。リクツぬきに、なんでもまずじぶんでやってみる、これはわたしが中岡さんから学んだことです。臨床哲学がはじめられたころ、わたしがあれはいけない、これはいけないと、ゴチャゴチャとリクツばかりを並べていたら、臨床哲学は複数あっていいのだから、とにかくやってみればいい、と仰っていたのを思い出します。残念ながら、わたしが中岡さんからヘーゲルについて学んだことはごくわずかにすぎませんが、それ以上のことをわたしは中岡さんと〈ともにいる〉ことでみずから学んだと思います。中岡さんには、先日書いた「裏ゼミ」でわたしが大学院になるまで3年間かけて『精神現象学』をほぼ毎週いっしょに読んでいただき、さらにわたしが大学院に進学したのち教養部が廃止され、中岡さんが倫理学研究室に分属されたのをきっかけに、「裏」が「表」に返って正規の授業となって、受講者（3人！）の希望で『大論理学』を購読していただきました。なにより中岡さんは「教える」ということをされない方でした。ヘーゲルについてウンチクを垂れることはまったくいっしょになされません。わたしがヘーゲルを読んでこんなことを考えた、と伝えると、中岡さんは面白そうにそれを聴いておられました。正しい、間違ってる、とはけっして口にされず、わたしはこう理解する、とか、わたしは別の考え方をする、という言い方をされました。正誤のはっきりしているように思える語学の面でさえ、「それは間違っている」と否定をされませんでした。「別の考え方をする」、「あなたはそうおもう、わたしはそう思わない」という態度を徹底されていたように思われます。

いまから思えば、中岡さんは徹底して自己というあり方にこだわられていたのですね。さきのような中岡さんの基本的態度も、この自己へのこだわりと深くつながっているようにわたしは感じます。それは中途半端な相対主義の態度とはまったくべつのものでしょう。そして、チョウエツロンテキシユカンセイとか、カンシユカンセイとか、自己や実存をとびこえた、どこにあるのか分からない思考に対する中岡さんのシニカルな構えもわたしには示唆的なものでした。中間的なもの、仲裁するものとは決して折り合わない、他なるものに対しても自己との境界を見失わない、こうした姿勢は哲学者としての中岡さんのなかで一貫していました。中岡さんはコミュニケーションを主題に、長年講義をされていましたが、中岡さんの中心的な課題は「自己内コミュニケーション」を考えることでした。わたしは、正直、長い間この考えがよく飲み込めませんでした。相変わらずアタマの固いわたしは、コミュニケーションとはそもそも自己と他者のあいだのちがいを前提にしているはずなのに、どうして「自己内」と、このひとはいうのだろうか、と首をひねっていました。そんなわたしをよそに、中岡さんは最終的に「自己変容」という主題にたどり着かれたのです。

今回の箕面「こどものてつがく」では、こどもたちにビデオカメラを渡してじぶんたちを撮影しあう、というワークをやってみようと思います。カメラはわたしたちの存在を停止させ、凝固させるどころか、変容させます。カメラはどのような自己変容を招くのでしょうか。

2014年7月31日

沖縄に来て四日目です。ここ数日、八重瀬町にある高校に早朝から通って授業をしています。やや疲れ気味ですが、相変わらず沖縄の高校生たちにパワーをもらっています。沖縄の自然や人々には不思議なパワーを感じます。朝の授業が終わったあと、午後にサッカー部の1年生たちと輪になって、好きなプレイヤーについて話しあったのですが、ここでも哲学相談をわたしなりにアレンジし、じぶんが何に憧れているのかを深く考えてみるというワークを試しました。よい感触が得られたように思います。高校生たちは好きなプレイヤーや有名人は誰ですか、という問いを選びました。そこでこの問いにわたし自身も含めて1人ずつ答えます。この同じ質問に全員が3回答えました。それから各自あげた3名のあいだに共通点があるか、どんな違いがあるかについて、それぞれ考えました。ある男子生徒は、2人目まで男性のサッカー選手をあげましたが、3人目は女性の選手をえらびました。2人目までは、同じようなカッコいいプレイをしたい、というのが理由でしたが、3人目の女性選手については、あのように笑顔が美しい選手になりたい、と彼は答えました。そして、そのように答えたじぶん自身におどろいていました。セッションの最後に、きょうはなにか発見はありましたか、とわたしが質問すると、ほとんど全員がイエスと答えたので、彼以外にも答えてくれたみんなにそれぞれ発見があったようです。

対話というと、たいていの人が、異なる立場や考えの人たちがフラットに話しあうための媒介や介入の仕方、方法論のことを思い浮かべるようです。中岡さんも、一時期、ミディエーションや調停に関心をもたれていましたね。しかし、中岡さんやわたしが知った哲学相談や哲学対話は、そのような誰かのあいだに立つものとは違うと思われませんか。中岡さんは早くから、対話を通して導かれた結論や結果よりも、対話を経験した人たちのなかに生じる変容に関心を寄せておられました。異なる自己たちのあいだにたって、いかに擦り合わせを行うのか、なんて余計なお節介ですよ。

わたしたちが臨床哲学で対話をはじめたときに、「ファシリテーター」という中途半端なことを導入してしまったことに、わたしは心から後悔をしています。中岡さんが対話のなかでファシリテーター的なふるまいをなされないのを見て、わたしは中岡さんは向いていないのだな、と勝手に納得していましたが、そもそも前提がまちがっていたようです。どこかで全体を俯瞰できるかのような錯覚をもってしまったときに、哲学の営みは止まってしまい、別のものに変質してしまうのではないのでしょうか。

台風が近づいています。徐々に雨風が強くなるなか、これから米軍普天間飛行場と嘉手納飛行場にはさまれた北中城まで移動し、「グクルの森」というコミュニティカフェで、哲学カフェを開きます。わたしは沖縄民謡、その歌に込められた人々の思いにすっかり心を奪われてしまいましたので、テーマを「歌の魂」にしたのです。歌の力を沖縄の人たちがどのように感じてるのか、ぜひ聴いてみたい。ここでも午後のセッションと同じやり方をします。いつも

やを熱唱される中岡さんが参加されないのが残念です。中岡さんならどの歌に魂を感じられるのでしょうか。中岡さんは以前から岩国に戻られたら、米軍基地をめ

ぐる哲学カフェを開きたいと仰ってました。実現の折にはわたしもぜひ参加してみたいと思っています。

2014年8月2日

なんとか台風が通り過ぎました。まだ空にうす雲がかかっていますが、今朝はウソのような静けさです。対話をしているというのに、口ばかり動かして、からだやその場の環境を無視してしまいがちなところが気に食わない、とわたしは思っていました。対話は全身をもちいてなされるものであるはず。口先だけなら議論で十分です。あのドイツ発祥の、何日もかけて一つの例について話しあう対話法も、もともとは豊かな自然を肌で感じられる田園風景のなかでゆったりとなされていたはずですね。わたしは沖縄という環境を活かした哲学の対話プログラムをやりたいと思い、オランダの哲学者ピーター・ハーテローに昨年教えてもらった哲学散歩を、これもまたわたし流にアレンジして、早朝に海岸の散歩がてら実験してみました。哲学と散歩といえば、中岡さんとはじめて哲学相談の会議に向かう途中、ハイデルベルクで立ち寄った哲学者の道をいっしょに散歩したときのことを思い出します。ピーターのことはよく覚えていらっしゃるでしょう。彼が阪大で哲学相談に関する集中講義を行ったときに、中岡さんも通訳を兼ねて一緒に受講されていました。その彼の考案した哲学散歩はこうです。まず参加者一人一人に哲学者の書いた文章からの短い引用が最初に手渡されます。そして各自その引用の内容を要約する概念を歩きながら考え、その概念にふさわしい場所を見つけたら他の参加者にそれを告げる、というものです。これはこれで非常におもしろいのですが、わたしは哲学者からの引用は用いず、まったく別のやり方を試してみました。海岸にはいろんなものが漂着します。歩いていて見つけたものを拾い、それを拾った場所とは別の、ふさわしいと思われる場所に置き、それを他の参加者に見せ、それについて問いあうというものです。ことばを最小限にしか使わないというところがこのやり方のポイントです。じぶん自身に向きあう、ということはことばを使用するときだけの特権ではありませんよね。

スポーツ、音楽、ダンスなど、じぶんの

のからだに対して感覚を研ぎすます実践のなかにも、じぶんを知るというチャンスが潜んでいます。もっとも誰かのコピー、模倣と反復ばかりしては、そんなチャンスは訪れないでしょうが。

我流の哲学散歩もとても有意義なものでした。場所と思考の関わりを最大限に活かそうです。それにしても、わたしは感謝せずにはおれません。鷺田さん、中岡さんのはじめられた臨床哲学に加わるおかげで、わたしは哲学をじぶんでやってみることを学び、その楽しさと苦しさをともに味わうことができるのです。不真面目な大学院生だったわたしは、哲学につねに不信の目を向けていました。そんななか、臨床哲学が目の前で産声を上げ、哲学が生まれ変わろうとする、その現場に立ち会いたいという思いで臨床哲学に飛び込みました。

苦悩する人たちの前でともに哲学する——なかなか魅力的なフレーズですが、注意が必要です。考えることのモチベーションをじぶんの外に投影するだけなら、それは研究者にありがちなカムフラージュにすぎません。とりわけ苦しみを知的関心の肥やしにし、知的資源へのアクセス権を

ふんだんに活用するだけで終わるのならば、それは決してともに哲学することにはなり得ないでしょう。

波打ち際に打ち上げられた黄色いスポンジのようなものが目にとまり、なぜかわからないけれど、わたしはそれを拾い上げました。それはわたしではないものですが、わたし自身でもある。このことに、ともに、の秘密があるように思えます。

2014年8月10日

苦悩、たとえそれが身体的なものであったとしても、それはスピリチュアルな苦しみではないでしょうか。苦悩は、あなた、とか、わたし、とかいった個性や人称性をもつのでしょうか。小林恭さんがご退職の前にコミュニケーションデザイン・センターで最後に行われた講義で、“I” “desire” “act” が苦しみの源泉であるとお話されたのを中岡さんも覚えておられるでしょうか。小林さんのお話を拝聴しながら、わたしは臨床哲学に不満を抱いていると悟りました。不満であって、けっして批判や論難ではありません。批判なんていうお高くとまったものではなく、むしろ下世話な欲求不満だと思います。欲求不満は欲求する者の方にしか原因がない。欲求するがゆえの不満です。ないものねだりもそうです。しかもたちが悪いことに、たいていの不満は何に不満を感じているのかわからない。いずれにしてもこれは臨床哲学が生まれたばかりにわたしが抱え込んでしまった不満です。

きょうは、とよなか国際交流協会で毎月集まってる会に来ています。こどもたちとするように毛糸でボールを作り、それを参加者のあいだで回しながら、さいきん困っていることや不満をぶちまけます。マイノリティの支援や人権活動にかかわる人たちが集まっています。わたし以外は全員女性で、女性であるがゆえに降りかかる厄^{わざわい}がしばしば話題にのびります。人権や教育にかかわる人たちのあいだですら男性優位の現実は変わりません。声は不満や恨みつらみにしかなりません。理路整然と語られることに苦しみは現れません。ほかならぬわたしも

泣いてしまいました。

この場だけではありません。わたしは倫理学研究室で女子学生の論文相談に乗りながら、彼女らが社会によって与えられた女性という性別ゆえにどうしても避けられない問題について、正面から考えようともがく姿にいく度となく立ち会ってきました。言いようのない不満がその根っこにあります。不満はどこまでいっても正当な主張には至りません。それでもなんとか表現しようとする真摯な姿勢にわたしは敬意を払わずにはおれません。わたしがどうしても気になるのは、彼女らのような、じぶんの置かれた状況に対して真摯に考察する態度への学問的評価がどこでも低い、ということです。

これも不満ですが、せめてじぶんがとる評価軸とは異なる軸があるのではないかと、または、その当の軸を持ちこむことで暗黙のうちに排除しているものがあるのではないかと、という想像力が欠けています。

臨床哲学が提唱されてすぐの頃から、臨床哲学はジェンダーや社会的マイノリティのことをどのように考えるのか、という問いかけがありました。臨床哲学とはいえども、社会問題として注

目されやすいメジャーな問題に目を向けがちかもしれません。その理由の一端に、大学研究の資金調達のために、社会のメジャーな問題に言及せざるを得ないという現実があるのでしょうか。それはそれで深刻な構造的な問題です。ですがわたしが気になるのは、そのような事の大小ではありません。むしろ社会でのマイナーな立場から問い続ける人々への共感が不足しているのではないかと。ときたまフェミニズムやセクシュアルマイノリティの視点に言及するだけではすみません。言及する、というこの包括的で知的なふるまいに苛立ちを隠せない人たちがいるのではないのでしょうか。既成の社会のなかで用意されたゲームに乗ることに抵抗せざるを得ない人々、または、そのゲームに乗ってしまうじぶんとそれに抵抗しているじぶんのあいだで葛藤を抱え、とりみださざるを得ない人々。異なる欲求どうしがじぶんのなかであらう。不満しか口にだせないじぶん自身にさらに不満がつる。こうした怨念の循環には、「傍ら」と
か「の前で」とかということばあまりに無力です。

2014年8月21日

このあいだは唐突にわたしの不満を連ねてしまい、すみませんでした。このところ考え続けていることを書かずにはおれなかったのです。まだまだ書いていないことがたくさんあります。いづれにしても、わたしの不満ですから、わたし自身がそれを解決するしかありません。たとえ解決の見込みがなくても、それを抱えて生きなければなりません。きょうは舞踊家の友人たちといっしょに奈良の吉野川沿いにある障害者療護施設に住むある女性を訪ねてきました。これまでは、同じ奈良にある障害者ある人のためのアートセンターで毎月顔を会わせていたのですが、事情があってこちらに引っ越されたのです。彼女とのつきあいはもう10年になります。友人はダンスによって、わたしは音楽に通じて、彼女と交流をはかってきました。重度の障害があって、ふだんは車椅子に座ったままですが、ダンスと音楽がはじまると、彼女は別人のように歌ったり踊ったりします。そのとき、彼女だけではなくて、いっしょにいるわたしたちも大きく変容するのです。それがどういうことなのか、まだ見極めないうちに、彼女は引っ越してしまい、もうそういった機会がなくなってしまいました。きょうは半年ぶりの再会でしたが、彼女は別人のようでした。それでも友人は踊り、わたしは音楽を奏でました。

いっしょに訪ねた、障害をもつ彼が大活躍しました。彼はいつもわたしたちを驚かせます。ダンスや音楽が彼や彼女、わたしたちを変えるものではありません。芸術が主語になるかぎり、芸術はわたしたちの何も変えません。芸術や哲学は療法となるでしょう。ですがそれは理論や方法、技法ですらありません。あるのは一つの生だけです。彼女やわたしたちがダンスや音楽になるのです。それは一つの生です。

2014年8月25日

とうとうブラジルにきました。花柄のシャツを着たウォルターがリオの空港まで出迎えてくれました。わたしはウォルターが日本に来たときに教えてもらった、マリア・エレナ・ウォルシュの「蟬のように」という歌がとても気に入って、彼のためにスペイン語で歌おうと必死で練習し

たのです。今晚、彼の家に招かれるので歌うつもりです。

歌といえば、先日の続きになりますが、さいきん、哲学はほんらい歌である、と考えるようになりました。歌はたんなる伝達的手段ではなく、人が歌そのものになるのです。歌の好きな中岡さんに気に入ってもらえるのではないのでしょうか。歌の王道がラブソングであるように、哲学もラブソングです。厳密に言えば、日本語の哲学はラブソングになり得ませんね。フィロソフィーとは、愛であり、その愛の相手が知ることです。そしてある女性哲学者がいうように、知への愛だけでなく、愛の知でもあります。日本語の哲学は、皮肉なことに、愛と欲が切り落とされた去勢された哲学です。それゆえ、欲することも、満足することはありません。単なる知なのです。わたしが臨床哲学に感じる不満の理由はここにあるかもしれません。臨床哲学には愛が足りません。

ウォルターはソクラテス以前の哲学、哲学が詩であったころを研究していたそうです。彼は、フィロソフィーが知そのものではなく、知への関係であることを忘れてはいけない、と言います。わたしたちは、こどものときにすでに知との関係を結ぶ。その関係は永遠のものであって、こども、とは人生のある一時期を示す名称ではなく、この知への関係そのものを指しているのだ、と。それゆえ、わたしたちが日本で「こどもの哲学」と呼ぶのと同じように、彼も「こどものための哲学」ではないのだ、と言います。

2014年8月27日

ウォルターは貧しい地域にある小学校でこどもの哲学を続けています。きょうはリオデジャネイロのセントラル駅から電車で小一時間ほどかかる郊外の町にある小学校を訪れています。驚いたことに、彼は小学校のなかに「哲学の家」や「哲学の部屋」をつくっているのです。きょう訪れた哲学の家ではフィロと呼ばれる猫が飼われています。

彼は詩をいつも大切にしています。彼や彼の仲間たちは、問いのことも詩と読んでいます。毎回のこどもたちとのセッションでは、最後に詩を書く時間があり、その時間に考えた問いを一人一人詩として書き、順に読み上げていきます。最後は朗読会になります。

哲学、詩、歌の共通点はパフォーマンスではないのでしょうか。パフォーマンスとは、それがなんども繰り返しなされるときでさえ、つねに一回きりです。同じパフォーマンスは二度とありません。書かれた哲学にあまりにも依存して来たわたしたちは、対象化され、反復可能な知の形態に固執してきました。講演ですら、あらかじめ書かれており、後に文字として公開されることがほとんどです。わたしたちは、その場で消え去るものを軽視したり、結果として残されたものばかりに目を向けがちです。哲学者が生きた瞬間よりも、その哲学者が残した足跡、痕跡を必死に嗅ぎ回り、何かそこに埋まっていないかと詮索します。しかし、なにより哲学者が大切にしてきた真理というのは、いつでも一回きりだったのではないのでしょうか。

ある哲学者は真実を語るという実践について探究しました。こうした哲学、哲学者のパフォーマンスと結びつけて考えるとおもしろいではありませんか。真実を語るという実践をもっとも特徴づけるのは、それがなされるのが一回きりであることと、その一回きりの行為によって、発言

する者自身が何らかの変化に晒されることです。つまり、真実を口にすることが状況をまったく変えることなく、とりわけ口にした者自身にとって変化をもたらさない場合は、真実ではないのです。現代でいえば、じぶんがマイノリティであることをカミングアウトすることがそれにあたるでしょう。ひとはカムアウトするとき、じぶんがそれであるものと、じぶんがそれを言うことを一致させ、引き受けなければなりません。それが真実なのです。カミングアウトの真実は、「わたしは～である」ということばが、「わたし」とある社会的カテゴリーとを結びつけ、両者を固定することにあるわけではありません。むしろこの「わたし」が既存の社会的カテゴリー、呼び名に根本的に変更を加え、意味を変えてしまうのです。これは自己変容でしょうか？ いえ、それ以上のものです。自己変容は、自己というなかで生じるものですが、カミングアウトは自己変容と他者変容のいずれか、あるいはそのいずれでもありません。むしろそれは新しい状況を創造し、なんとかそのなかにじぶんを生まれ直させようする危うい試みです。

歌を歌う。パフォーマンスのように、その場限りに成立し、しかしそこに居合わせた者が変わらぬおれのような、そのような実践にわたしは哲学ほんらいの力と魅力を感じてなりません。ですが、わたしが臨床哲学に抱く不満はここに 있습니다。臨床哲学、とくにその書き物については、書物や理論、その他文化資源への参照に依存することによって、かろうじて知としての体裁を整えています。それら知を中心で結びつけているはずの愛を赤裸々に語ることが果たして十分になされてきたでしょうか。批評や論評、あるいは解釈や記述といった、近代的な知の形式に身を隠し、真実を語ることのリスクをあいまいにしてはこなかったでしょうか。少なくとも大学ご在籍中は、鷺田さんも中岡さんも最後まで尻込みされ、後の世代に押しつけられたと言えないでしょうか。それとも、それはわたしたちのためにわざと残されていった課題なののでしょうか。もし身をもってこのことを教えていただいたのであれば、わたしはこのフラストレーション、臨床哲学のなかにいる居心地悪さを喜ばなければなりません。なぜならそれはわたしの知への愛の目覚めを意味するからです。

わたしが

中岡さんの近著で気に入っているのは、哲学者の古典に並んで唐突にご自分の経験が例として引かれるところです。頭の上に鳥の糞が落ちて来た、とか、女子学生に不意に頭のことを言及される、とか、ふつうなら書きたくないと思うようなご経験にあえて触れられ、我が身を晒して哲学をされている様子がよく伺えます。ですからこれは、わたしにとっては著作というより中岡さんの身体のようなものです。中岡さんの言動はいつも、パフォーマンスのように、カラオケの歌声のように、そこに居合わせるわたしを楽しませてくれるものでした。それはわたしにとって幸運だったというほかありません。

これは、中岡さんと臨床哲学に宛てたラブレターです。じぶんで書いたことを読み返し、これは読むに耐えないと思われる箇所を消してしまいましたが、何が書いてあったのかご想像いただくのも一興かと思い、その検閲の後には残しておきました。不細工だし、読みにくいですが、最後までお目通しいただけたならば幸甚に存じます。

(ほんまなおき 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター・准教授)